

## 連体修飾節構造に関する研究の現状と課題

大島資生（首都大学東京）

### 1 連体修飾の分類

（課題）寺村(1975～1978)の「内の関係」「外の関係」という二分類(奥津(1974)も同様の見解)は適切か、あるいは、さらに細かく分けるのか。

この問題に関しては高橋太郎(1979)、加藤(2003)をはじめ、様々な分類法が提案されている。だが、少なくとも、伝統的な二分類は保持すべきではないか。

外の関係のうち、従来「内容補充の関係」と呼ばれているものは、主名詞の意味的情報によって修飾節の形式が制約される(主語の有無、述語形式。「事実」の場合、修飾節に「だろう」などの要素は入ることができない、一方、主語は入ることができる、など)。

#### (1) 太郎が麻薬密売人と接触したという事実

\*太郎が麻薬密売人と接触しただろうという事実

これは、修飾節を文の形に開くことができる「内の関係」ではみられない特性である。いわゆる「相対名詞」(奥津(1974))も、「相対補充」と呼ばれる修飾節構造を形成できるという特性は、それ自身が備える意味的情報によると考えるべきである。「相対名詞」の意味的情報は修飾節が表す事態と主節が表す事態の間に、位置的・時間的に相対的な関係があるということを示す、ということを含んでいると考える。

すなわち、名詞(の意味的情報)が連体修飾節の構造を支配するか否かが重要な差異だと考える。

以上のように、外関係を形成できる名詞については、意味記述の中にしかるべく情報が記載されなければならない。とは言っても、ある構造が「内の関係」か「外の関係」かは、いつでも明確に区別できるわけではない。

### 2 連体修飾節の統語的性質—構造的な区別

（課題）内の関係と外の関係の間には、統語的に明確な違いがあるのか。

内か外か、どちらとも言い難く、また、既成の分類にもおさまりにくい例がある(高橋美奈子(2012))。

(2) 長女が20歳を過ぎたある日、知人から縁談が持ち込まれた。坂本さんは「ご縁があればどなたでも」と快諾した。

Comrie(2002)は「日本語連体修飾節は属性節であって、空所(gap)を持たない」と論じている(Cf. 大関(2008)、大関(2011))。Comrie(2002)の見解は、内の関係と外の関係の間には、統語上明確な差異はない、ということにつながるだろう。ただし、「太郎が読んでいる本」のようないわゆる内の関係の修飾節についても gap がないとする見解が妥当か否かはさらに検討する余地がある。なぜならば、上のような修飾節と主名詞から「太郎が(その)本を読んでいる」という解釈を得るためには手がかりが必要だと考えられるからである。

Comrie(2002)が志向しているのが統語的な差異よりは、意味解釈に重きをおこうとする姿勢だとする

なら、それは正しい方向を目指していると考えられる。大島は基本的には、内の関係と外の関係の違いを、主として意味的なところに求めようとする立場である。

上述の考えを進めていくと、連体という形式の内部、具体的には内の関係・外の関係の間には、統語的には顕著な差がないということになる。そうすると、次に問題になるのは、本プロジェクトの中心課題である連用と連体の関係である。

### 3 連用と連体

(課題) 連体と連用 どちらも「修飾」とは呼ばれるが、共通していることは何か。逆に、どのような点で異なるのか。従来「修飾」という同じカテゴリに一括されてきたことの妥当性を、検証する必要がある。

この点に関連して、そもそも「修飾」とは何かという根源的な問いも含め、様々な検討課題を見出すことができる。今回のプロジェクトの中でも、様々なアプローチについての発表が行なわれている。(Cf. 堀江(2011)、橋本(2011)、江口(2012)[名詞句と疑問詞節の関係]、天野(2012)(「主要部内在型関係節」に連なる問題)、青木(2012)、松木(2011)[複合辞は、連用と連体がまさに交差する場]、大島(近刊)) 大島(近刊)では、次のような例を挙げ、接続節に近い意味的内容を表わす連体修飾節構造を観察した。

- (3) a. いつもは強い酒を浴びるほど飲む人が、今日はビール一杯でひっくり返った。  
b. あの人はいつもは強い酒を浴びるほど飲むのに、今日はビール一杯でひっくり返った。

連用と連体の関わりを考える上では、構造の上での階層性、つまり構造上の差異よりも、意味的な違いのほうが重要だろう。

節による連用修飾と連体修飾を対比する場合、主節と修飾節という二つの節の間関係が問題となる。というのはどちらも二つの節が組み合わさった構造だからである。連体の場合は被修飾名詞、連用の場合はいわゆる接続助詞などが結び目となって二つの節を結合させる。

連用の形式(いわゆる接続助詞など)で節間の意味関係を明示しながら並置する(連用)のか。あるいは意味関係を明示せず、受け手の解釈に委ねる(連体)のか。形式の選択を決める要因はもっぱら意味的なものと言えよう。(また、連体修飾節のような階層性を生じる構造への選好があるか否か。Cf. 橋本(2011))

現代語における連体形は終止形とは、ほとんどの場合形態の違いがない(例外は、いわゆる形容動詞)。そのため、直後に名詞がくるか否かによってしか区別できない。したがって、連体形と終止形は、それ自身に識別力の備わらない形式と言えよう。この点、連用諸形式と対照的である。

そのような捉え方を推し進めていくと、「修飾」として一括りにされてきた連用と連体は、実は全く異なるものではないかというところにいきつく。

節による連体修飾において、連体修飾という機能の本質はむしろ、述語が「受ける」機能ではないか。「かかる」働きは二次的に派生するのではないか。(大島(近刊))

「受ける」というのは、終止形と同様、様々な要素をとって節を作る働きである。連体修飾節は主名詞に対して「限定」という作用を行なう。限定には、ある条件を満たすか否かという区別が伴う。そこで、連体修飾の成分は真理値を定められることが必須だと考えられる。真理値を定められるのは、一定

の独立性を備えた節である。したがって、連体形の重要な役目が連体修飾節を形成することだとすれば、その基本として、節を作ること、つまり様々な要素を受けることが第一義的な働きだと考えられる。

連体形式そのものの位置付けを考えるに当たって、欠かせないのが次の問いである。

#### 4 連体修飾節と主節との差異

(課題) 現代語において、連体形と終止形の差異が形骸化しているとしたら、連体修飾節と主節との違いは、そもそもどのようなことか。(加藤(2011)、加藤(2003))

一例として、テンス解釈の差異がある(大島(2008)(2011))。

(4) 社長が使ったスライドは秘書が手直ししました。(大島(2011))

a. [社長がスライドを使う] → [秘書が手直しする] (主節時基準/発話時基準)

b. [秘書が手直しする] → [社長がスライドを使う] (発話時基準)

連体修飾節内部のテンスは、深い階層におけるテンスだと考えることができ、発話時テンスとは構造上の距離があると考えられる。ここで、問題となるのは、構造上の深さは、修飾節テンスを、主節から切り離すのか、より強い支配下におくのか、という点である。

また、非制限的修飾節の場合に発話時基準解釈が強くなる理由についても検討の必要がある。非制限的修飾節は意味的に主節と同等に近いといつてよいか、などの問題である(大島(2011)の議論も参照)。

以上で述べたテンス解釈は意味的事象ゆえ、構造の関与は限定的と考えるべきか。この問題に関してはさらに検討を要する。

#### 5 主文と修飾節の間の、生成段階の差異を記述する方法

(課題) 南の四段階をどう調整すれば、日本語連体修飾節を無理なく説明できるか (cf.大堀(2012))

特に外の関係の中の内容補充の関係について、主名詞の意味特徴によって修飾節の形式に様々な制約が見られる(1で既述)。南の四段階とは微かにずれる部分もあるという印象を持っている。四段階を改訂することで上手く記述できるのかどうか。

／参考文献／

[本プロジェクト研究発表会資料]

※次の web サイトに掲載(予定)

<http://www.ninjal.ac.jp/research/project/b/complexsentence/complexsentence-pm/>

青木博史(2012)「接続部における名詞節の脱範疇化について」(2012年12月15日 国語研究所)

天野みどり(2012)「名詞節か副詞節かー「の節」の名詞性・節性の検討ー」

(2012年12月15日 国語研究所)

江口正(2012)「主節の名詞句と関係づけられる従属節のタイプ」(2012年9月29日 九州大学)

大関浩美(2011)「言語習得過程から見た日本語の名詞修飾節」(2011年5月7日 国語研)

- 大堀壽夫(2012)「従属句の類型を再考する」(2012年12月15日 国語研究所)  
加藤重広(2011)「複文の単文化一節性と非節化一」(2011年12月17日 神戸・ユニティ)  
高橋美奈子(2012)「時を表す名詞を主名詞とする名詞修飾表現について」(2012年5月13日 学習院大学)  
坪本篤朗(2011)「いわゆる主要部内在型関係節の形式と意味と語用論  
—〈全体〉と〈部分〉から複文構造を考える—」(2011年9月11日 名古屋大学)  
橋本修(2011)「上代・中古資料における非制限的連体修飾節の分布」(2011年9月11日 名古屋大学)  
堀江薫(2011)「日本語の複文の「内」と「外」: 類型論の複文研究の成果を踏まえて」  
(2011年2月19日 神戸・ユニティ)  
松本正恵(2011)「接続関係を表示する複合辞的表現—名詞性接続成分のタイプから見た  
連体複文構文と連用複文構文の接点—」(2011年12月18日 神戸・ユニティ)

[単行本・論文]

- 大島資生(2008)「連体修飾節と主節の時間的關係について」『日本語文法』8巻1号 日本語文法学会  
大島資生(2010)『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房  
大島資生(2011)「日本語連体修飾節構造の時制解釈について—修飾節・主節がともにタ形  
述語をもつ場合—」『日本語文法』、11巻1号 日本語文法学会  
大島資生(近刊)「接続節に近い意味合いをもつ連体修飾節」『連体・連用を考える』(仮題) ひつじ書房  
大関浩美(2008)『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版  
奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店  
加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』  
高橋太郎(1979)「連体動詞句と名詞のかかわりについての序説」高橋(1994)所収  
高橋太郎(1994)『動詞の研究』むぎ書房  
寺村秀夫(1975-1978)「連体修飾のシンタクスと意味(1)-(4)」寺村(1992)所収  
寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』くろしお出版  
南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店  
南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

Comrie, B.(2002) Typology and language acquisition: The case of relative clauses  
In A. Giacalone Ramat(Ed.), Typology and Second Language Acquisition Berlin: Mouton de Gruyter  
pp.19-37